

〈研究ノート〉 大正登山ブーム到来への過渡期における立山の登山環境について —大井冷光の見た「立山登山」をとりまく状況—

高岡 陽一

はじめに

日本の登山は、江戸時代の中頃から講社による信仰登山や物見遊山の旅として急速に広がった。明治のはじめ頃、明治新政府の神仏分離令による廃仏毀釈運動の嵐が各地の山岳霊場に吹き荒れ、民衆の信仰登山が下火になった。一方、この頃、いわゆる「お雇い外国人」の探検登山や日本文化を追体験し日本人の心の世界を共感しようとする霊山への登山が始まり、中頃には盛んにおこなわれるようになった。信仰登山は、社会の安定とともに明治の中頃に復活している。又、この頃には、浪漫主義文学の影響もあって登山人口もしだいに増え、近代登山の幕開けとなった。明治38年に日本山岳会が創立されたことを契機に、日本アルプスを主要な舞台として探検登山がはじまり、明治40年に陸軍参謀本部陸地測量部の柴崎芳太郎測量手一行が三角点を埋設するためそれまでタブー視されてきた剣岳登頂を果たしている。また、明治の終わり頃から大正時代にかけて、学校集団登山が始まり一般の登山普及にも大きな役割を果たした。大正時代になると登山は大衆化し、社会的現象ともいえる様相を呈し、スポーツ的登山の時代へと発展する糸口を切り開いた。

さらに、大正時代の終わり頃には、ヨーロッパの“峰を征服する”本格的なアルピニズムの時代に入った。また、この頃は、信仰登山の要素と探検登山の要素を併せもった日本独特のアルピニズムが生まれ、登山のプロセスをも重要視するそれまでの信仰登山と似た傾向が見られる。その一例として、大正12年、伊藤孝一等は周到な計画と莫大な費用を投じて、壮大な雪山踏破と記録映画の撮影を果たしている。

大正期は日本三霊山の一つとして全国から多くの信仰登山者を集めてきた立山にとっても、近代登山への転換期であったと考えられる。そこで、この時期の立山登山をとりまく状況について、童話作家大井冷光の新聞記者としての目を通して明らかにする手がかりとなる資料を紹介してみたい。大井冷光の略歴を記すと、本名を大井信勝といい、明治18年に現在の富山市水橋に生まれている。明治39年に高岡新報の記者になり、富山日報に移籍後は冷光の名で多くのお伽噺や童話を執筆している。大正元年には時事新報社に入社、この頃より全国各地で精力的に自作童話の口演会を開くが、大正10年神奈川県での口演中に急逝した。

1 大井冷光の立山登山ルポ

冷光は明治40年に高岡新報の立山探検隊のメンバーとして立山登山をし、翌年、立山の自然・科学・人文などを研究調査した手引き書で自身の最初の著述である『立山案内』を刊行している。さらに、明治42年には富山日報立山通信特派員として室堂に7月25日から43日間滞在し、天界通信『天の一方より』を連載して、接待所における蓄音機や福引き等での登山者への接待の様子や冷光が実際に立山で見聞きした

事実についての感想などを、時には客観的に時には感情的に伝えている。

(1) 『立山案内』に見る立山登山の状況

明治41年、冷光は立山の総合案内書といえる『立山案内』を書いている。この『立山案内』は、「・・・愛山の士は、必ず先づ我が立山に杖を立て、科学に、文藝に、將亦、精神修養に、之を探查し、研究する處あり、以て無盡蔵なる實益と趣味を、享受すべきもの

なり。」と緒言に述べているとおり、立山の名称・地質・動植物・気象・縁起・文学・登山路等についてB6サイズ100ページにわたり記述し、さらに登山準備及び心得についても言及している。その中で、大正末期まで立山登山者が泊まる唯一の山小屋であった室堂小屋について、「・・・室堂にては炊事器具の他、何等の供へもこれ無き故、飯米を初め凡ての飲食物は勿論、寝具も携帯せざるべからず、殊に室堂の夜間は氷点近くなる事珍らしからざれば、毛布及びフランネルの襯衣の如き最も必要なりとす登山中空腹を感じるを速かなるが、従来立山参詣者の慣習として、煎粉を携へ、山中清水を以て、之を解き砂糖を加へて食す、其味甚だ美なりと、試に携帯するも可ならん・・・」と記述しており、登山者が集中して混雑すると、夕食も食うや食わずで、ふとん類はなく、仮寝で夜を明かしたと言われている状況が窺い知れる。当時の室堂小屋の内部の様子は、石崎光瑤の撮影した写真で確認できる。

また、女性登山についても、「・・・路、元より峻険なるも、温泉よりせば普通婦女子と雖も登山は容易とす、編者登山の際、絶頂にて十三歳の少女の登り得たるを目撃したり・・・」という記述から、明治の終わり頃には、女性登山もしだいに行われるようになっていたと考えられる。「温泉よりせば」とは立山カルデラ内の立山温泉のことであり、そこから松尾峠を登って弥陀ヶ原に出て室堂に至る道である。

(2) 『天の一方より』に見る立山登山の状況

明治42年7月5日の富山日報は「破天荒なる我社の計畫」と題して、

「 ◆標高九千九百尺の立山々嶺に富山日報社接待所を設けて登山者を歓迎す

◆山嶺には社員大井冷光を駐在せしめ天界の消息を日々本社に通信せしむ

◆八月上旬・・・」

と、室堂に接待所開設の予告広告を掲載している。そして、富山日報の記者であった大井冷光はこの接待所に駐在して、『天の一方より』と題し34回にわたり立山登山ルポを連載している。富山日報の予告広告に

は、室堂に接待所を開設し演説会等の催しをおこなう計画の他に、東岩瀬浜に特設海水浴場を設け休憩所や脱衣所を設置する計画も記載されている。この「破天荒なる我社の計畫」がどのような経緯で富山日報の事業となったのかは不明であるが、当時の新聞社が社会事業の一環としてこのようなイベント事業を主催するということは、非常に斬新な発想と資金が必要であったと思われる。ある意味で社運をかけた事業の駐在記者の冷光にとっても、様々な視点で読者の関心をひく記事を書く必要があったと考えられる。その冷光の記事の中で、立山の登山環境や登山者について記述されているものを挙げてみたい。

明治42年8月6日 天の一方より (十)

「・・・案内者は佐伯五百津といふ老人で・・・老人は長之助草と角石のある處へ連れて往った、長之助草は薔薇科の一種で刻の多い葉の中から七辨八辨の野薔薇の様な可愛い花で今を盛りと咲いて居る、御領君と僕とは無宙になつて摘むと老人も『こんな花盛りは今初めだが、立山で此處丈だから其内に取絶えるだろう、何とか殖やさせたいものです』と僕等の思つた通りの事をいふ、實際立山の長之助草は黒百合以上に珍重なもの、何とか繁殖させたいものである、・・・」

「・・・硝子罎の破片の落ち散るを發見した、想ひ起す、一昨年夏、而かも丁度一昨日の事、僕が初期の登山の折に一行の後から跟いて來た高岡商業校の生徒某がこの斷崖に疾走を試み、遂に自ら停止する事が出来なくなり二十間餘も車返しに轉げ落ちた事があつた、幸ひにも僅かの巖角に引掛り九死に一生を得たが其時其生徒が水筒代りに胸にぶら下げて居た硝子罎は即ちこの破片であるのだ、この話を同行の五百津老人に語ると老人大に感心し是非その話を新聞に出して世の懲戒にして呉れといふ、・・・」

明治42年8月7日 天の一方より (十二)

「・・・室堂は先着順で居間を占領し、炊事場優先権を得る事になつて居るから、芦峯寺では宿屋も仲語も成る可くは朝疾く出發させる其証拠には今晚の宿泊者が百三十四人(内尼僧二人)あるが其百人位は午後

一時から三時迄の間に室堂に着いて仕舞つた、・・・」

明治 42 年 8 月 8 日 天の一方より (十三)

「・・・室堂に籠つてから十日餘りになる、立山の仲語の雲助根性は充分に観察する事が出来た、最初數日は彼等の口實を本位として随分最眞目に觀た、殊に社務所や芦峠、岩峠の有志が『今では改まりました、仲語に悪い奴はをりません』と云ふたからそれ丈慎重に彼等の行動を注意した、處が何であろう、如何に最眞目に見たればとて、如何に山開き中僅か一月餘が彼等一年中の収入時であるからと理由を付けてやつたればとて、如何に客も其通りに仕向ければとて其狡猾なる事連も我慢が出来なくなつた、・・・仲語で登山者の感情を損ねざる程度の親切を持つ様な者は一人も無いのである、・・・」

明治 42 年 8 月 15 日 天の一方より (二二)

「・・・『歐米では獨りアルプスと云はず斯る深山幽谿にも到る處立派なホテルが出来て思ひ切り登山者に便宜を與へ、思ひ切り暴利を貪るのが例となつて居ます、それだから此地は面白い、望みがあると思ふと、客の有無しに拘らずホテル其他の設備を建て、仕舞ふと云ふ風です』とは同宿の吉田畫伯から度々聞かされる話だが、どうもこの室堂は前年度來の計劃で山開き前より工事に着手した九尺に三間の炊事場が今に屋根の片側しか出来ない仕抹、・・・」

明治 42 年 8 月 20 日 天の一方より (二七)

「・・・芦峠寺村菑僧房の出稼ぎ談、彼等が昔から雄山神社の守札や、御饌米を携へ、時には家内安全息災延命の加持祈禱をして稼ぎ廻る府縣は先づ愛知、長野を第一として岐阜、三重、静岡、山梨、新潟、群馬、茨城の各縣より東京、京都、大阪の三府中の一部に及んで居る、近頃までこの府縣を廻つた菑僧房は二十一房あつたさうなが目下の處八軒に減じて了つた、而し八軒は右の府縣で所謂立山講中を有する事何れも一万戸以上に達し、・・・道理で未だに立山登山者中白衣を着た連中は前記の縣に多く、一例をあげると一昨日の如き名古屋から來た主婦さんが三人、富山から室堂まで五日かゝつ漸つとの事で參詣を濟して歸つたもの

さへある、成程世間は廣い『僕は迷信が何うのと云つた口の持つて行き處が無くなつた』と苦笑すると老人隙さず『今後は御社の御計畫の様な方法で御神徳が擴まりますから結構ですが従前はこの立山講の方法ばかりで御神徳を擴めたものです全く敬神的の事業に他ありません』と真面目な返事をした、・・・」

明治 42 年 9 月 5 日 論壇 立山接待所本日限り閉場

「・・・努めて登山者を奨励するに努めたる結果は、意外にも、非常の好成績を挙げ、例年の登山者二千人内外なるに、本年は殆其二倍に達し、而かも、中流以上の人々の登山するもの著しく増加したりと聞く、・・・我社の此計畫が、一面に於ては、精神の修養体力の鍛錬等、心身共に強健たる國民を養成せんとするの目的に於て貢献する處ありしと同時に、一面に於ては、此破天荒の壯舉に依りて大に立山を縣外に紹介し得たるを認め、・・・」

この連載記事において、冷光は立山登山の現状に關しての問題点や意見等を数多く提示しているが、その中で自然保護や登山環境の不整備について言及し登山者の便宜をはかる必要性を示唆している。例えば、8月6日の記事の長之助草については、明治 22 年に須川長之助が立山で採集したことに因んでつけられた和名であることもあり、この長之助草の繁殖の必要性を強く訴えている。また、今後立山登山者の増加が予想されることに対して、全く対応できていない室堂の劣悪な宿泊環境についても強く嘆いている。さらに、論壇の中の「中流以上の人々の登山するもの著しく増加したりと聞く」という記述は、大正期の登山ブームの到来を予感させるものである。また、8月8日の記事の中でかなり辛辣な仲語批判を展開しているが、時を同じくして芦峠一山会の夏季總會において「明治四拾貳年七月八日、旧一山夏季總會相開き、左之要件ヲ取極メ候　・・・

第七條本規定ハ明治四十二年七月ヨリ実施ス

記

一、・・・従來之慣例ヲ無視シ各自任意ニ、地獄谷案内ヲ薪伐リ杯ヲ以て代任セシメタリ、或ハ別山案内

を自己利益ノ多寡を鑑シテ諾否を訴フル如キハ、如何ニモ職務上不忠実故ニ、之等の輩を矯正スル為メ、将来左ノ条項を議決シ、毎年山詰ノ任ニ当ル者ニハ、左記ノ条項ニ異背せざる立証として、姓名を本規程ノ尾末ニ自記捺印して、誠忠を表示スルモノト

条項

一、室堂以上、則チ三山ノ案内等ハ、参詣者ニ対シ尤忠実ニナシ、己レガ責任ヲ怠ラザル事。但シ別山ニ限り特ニ参詣人壹人ヨリ五銭ツ、申受ケ、本所ノ収

入トスルコトトシ、其他ハ一人ニテモ幾十人ニテモ式十五銭ヲ限り申受クルモノトス。其他ハ苟クモ申受クル事一切相ナラズ

二、地獄谷案内ハ詰員ニ職責タル所、乱リニ薪伐等ヲ以テ代任セシムル事堅ク相成ラズ但シ止ムヲ得ザル時ハ、飯炊キヲ以テ代用セシムルコトモアルヘシ・・・」

と、室堂詰員の職務規律の徹底をはかっているのがおもしろい。

2 『立山村民各位に懇ふ』に見る立山登山における問題点

大正元年、冷光は時事新報社の記者となり、雑誌『少年』に本格的に少年小説を書き出すようになる。また、この頃から「停車場を玄関とし、汽車を住みかとして」と述懐したほど、全国各地で精力的に口演童話会を開いている。

大正5年7月、芦峯寺宿坊教蔵房出身の佐伯茂治は東京小石川において神道立山講社設立のために、『神道立山講社教會設置趣旨書』および『立山登山設備に關する趣意書』を作成している。その中で、『立山登山設備案』を示し「参考として大町桂月氏田部重治氏其他二三の立山隨喜登山家の意見書を添付す」として、大町桂月『立山就きて越中人士に告ぐ』、田部重治『立山登山の設備に就て』、村井霞山『立山登山の設備に就て』、倉田初太郎『立山登山の設備に關する意見』、そして大井冷光『立山村民各位に懇ふ』の5人の意見書載せている。その中で冷光は、「・・・不肖十数年來この靈山の宣傳には及ばず乍ら舌筆を盡し居るもの此度立山講社佐伯茂治氏より愚見を徴せられしに對し聊か忌憚なき所感を披瀝して村民各位に懇ふる次第に御座候」と茂治の求めに応じての意見であるとして、「越中に名山立山ある事に因て世界的と相成候、然る處現今の状態を以てせば此の名山立山の世界的に紹介せらるゝに隨て登山難(まゝ)案内者の不親切難(まゝ)等好ましからざる欠點も同じ(まゝ)漸次世界的の評判と相成候、誠に痛嘆すべき儀に候はずや、此際何を

措きても先づ改むべきは、我山麓立山村民各位が登山者即ち外來者に對スル態度の改善と存候、立山村には古へより山と共に傳はる慣習の多々有之候由、さりながら現今之を實行する結果は却つて山神の尊嚴を冒瀆するが如き觀の有之候は大いに反省すべき點と被存候、何卒速に此名山を以て村民永久に生産的なる劃策を講ぜられ度切望に不堪候、室堂に於ける山錢條件の改善、仲語の名称案内上の統一、同雇入條件の改善、他村人夫に對する或程度の解放等、殊に其眼目と被存、登山者は大切なる顧客に御座候、顧客は村民各位の財産に御座候、靈山の神徳を八紘に輝すも輝かやかざるも一に各位の態度の如何に拘はるもの、此儀よくよく御熟慮相成度候、・・・立山の登山は道路の嶮岨と交通の不便等に於て當然不安を感すべきものあり、然もその登山者が山麓に到つて早くも宿泊難と案内者雇入難に不快の感を抱くが如く傳へられ候とは何たる相違に候はずや、實に生等(まゝ)愛山者の聞くに堪へざる苦痛に御座候、富士、御嶽其他諸名山に於ける岩屋の設備、近くは妙義山上大ホテル建設運動の如き例を見候ても、我登山道路の改修途中立山休憩所乃至宿泊所の増設、更に秀麗壯大天下に稀なる彌陀ヶ原大高原に於て、新設備の旅舎の建設等は既に十年前より村民の提議し、又縣會の可決して可然ものと被存候に、さりとは餘りにも心なき現状に候はずや、嗚呼之れも畢竟立山村民諸氏の和衷協同如何に帰因致候ものと被

存候・・・」と、富山日報記者として室堂に滞在した43日間の体験から改善すべき問題点を挙げるとともに、立山村民に対して登山道路の改修や宿泊設備の増設など登山環境の整備について協力を求めている。しかし、

佐伯茂治の神道立山講社の実態についてはまだ明らかではなく、『立山登山設備案』もまた後年の立山登山環境の整備にどのような影響を与えたのかはわかっていない。

3 『有頼会』の有頼像建設計画

口演童話に東奔西走していた頃、冷光は自らの童話創作の原点ともいえるべき立山開山伝説の主人公である佐伯有頼の銅像を建設し、これを郷土の少年少女の心のよりどころとしたいと考えていた。この計画は、新聞記者として批判的に立山の登山環境の不整備を訴えた大井冷光ではなく、童話作家として少年少女の健全な成長を願った大井冷光の思いのあらわれであったと思われる。

大正4年5月17日付の富山日報に、「・・・お伽噺を以て名ある本縣出身大井冷光氏は同じく本縣出身の彫塑家畑正吉氏と相謀りて有頼の銅像を建設し、児童教育上に貢献せん事を思ひ立つた畑氏の設計によると総経費約三千圓を要する、無論原形は畑氏の手になるもので、・・・如何にして醸金するかといふに、先づ児童によつて建設されたといふ事を明らかにする為、縣下に亘り各小學生より一人一錢宛位の醸金を求め、これを基礎とし、其上畑氏の製作に係る鑄像（銅像を縮小して高さ八寸位にせし床置物）を一定の価格にて賛助員に頒ち、・・・銅像は丈四尺八寸で台石を加ふれば一丈三尺になる予定である、建設場所は富山市役所と交渉の上、富山圖書館前に建設すべき希望である、元より立山の開山といえど、立山一局部に限られたのでなく、廣く富山縣の誇りとすべきものだから、縣人相協力すべきもので、隨て富山市へ建設するのである・・・」と、有頼像建設計画の趣意を記載している。さらに、当時時事新報記者であった冷光は『少年』第百四十二号の中で「・・・郷土傳説であり、口碑である越中お伽噺が産んだ少勇士佐伯有頼公をお伽的の銅像として富山市の中央にうち樹て、永世少年少女に立山昔話を語らしめたいといふ計畫を立てたのである。

この計畫を持つて五月十五日に突然、五年振りで富山にかへつた、早速地方の歴史家、教育家、政治家、知事、郡市長、新聞社長、その他滞在十二日の間に晝夜をわかつた奔走して賛助を求めると、何れも口を揃えて『愉快的計畫だ、面白い企てだ、その様な少年社會教育上有力な事業は是非にも遂行してもらひたい』と賛成された。・・・」と、少年有頼像の建設計画の実現のために奔走した様子を詳しく記述している。この像が郷土の少年少女の心のよりどころとなり、従来に増して立山登山が盛んになるよう願った冷光の思いが伝わってくるようである。

冷光は有頼像建設のために『有頼会』を結成し、その規約については、大正4年6月23日有頼會発行の『立山昔話』に、

- 「一 越中の代表的名山たる立山開山者佐伯有頼卿の傳説を一般に普及せしめ、以て兒童社會教育上資益あらしめたい目的で有頼會を設立致しました、
- 一 本會の事業としては大正五年初夏迄に富山市中央部に臺石共高さ一丈三尺の有頼卿の銅像を建設いたします、
- 一 有頼會には特別會員と正會員とを置きます、
- 一 特別會員は入會金・・・」

と記されている。なお、常務委員の一人として大井信勝（冷光）の名前がある。

また、『一山社年中議事録』の中にも「大正四年九月廿四日 一山總會（報告会）・・・

- 一、有頼會銅像ノ方へ寄寄スル事・・・」との記載があり、一山會も寄付をしたことがわかる。

この少年有頼像の建設計画は、彫刻家畑正吉により銅像の原型はできたものの冷光の急逝で銅像完成には至らなかった。しかし、冷光の夢は、立山開山1300周年にあたる平成13年に廣瀬誠氏の尽力により、「立

山開山佐伯有頼少年像建立の会」に寄せられた寄付金で立山連峰が一望できる富山市の呉羽山展望台に、冷光の郷土の少年少女に寄せる熱い思いを込めて実現された。

おわりに

大正期は、「岩と雪」を目指すスポーツ的登山志向の活動と登山を愛好する人々の活動が、社会的現象として大衆化する「大正登山ブーム」の到来の時期である。立山においても、大正12年には富山県営鉄道が千垣駅まで延長され一般登山者が増加し、山小屋の整備も進められた。

今回紹介した資料は、こうした「大正登山ブーム」到来へむかう過渡期の立山の登山環境を明らかにする上での手がかりと成りうると思われる。今後は、「大正登山ブーム」到来へむかう立山の登山環境の変化と、それを後押しした要因を明らかにできればと考えている。

- <参考資料> 大井冷光「立山案内」清明堂
大井冷光「天の一方より（大井冷光作品集）」桂書房
有頼會「立山昔話」
神道立山講社「立山登山設備案」
高瀬保「越中立山古記録第4巻」
「目で見ると日本登山史」山と溪谷社
「富山日報」